



Title	職業とジェンダーに関する実証研究
Author(s)	高松, 里江
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/60006
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	たかまつりえ 高松里江
博士の専攻分野の名称	博 士（人間科学）
学 位 記 番 号	第 2 6 0 7 4 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 25 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学 位 論 文 名	職業とジェンダーに関する実証研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 准教授 吉川 徹 (副査) 教 授 川端 亮 教 授 ノース, スコット

論 文 内 容 の 要 旨

日本ではこの数十年の間に男女平等に関する制度に改善がみられ、男女が労働市場で競合するようになった。このように、性別ではなく能力に応じて地位が決定される業績主義が強まるなかで、そのことが新たな男女間の格差を形成する要因となってきた。本研究では、業績主義を通じて形成される男女間の地位のあり方を実証的に検討した。

第1章ではまず、男女平等に関する制度の進展と課題について整理した。日本では、1986年以降、男女雇用機会均等法が施行・改正され、法整備という面では改善がなされてきた。また、女性管理職なども増加し、女性の労働環境は改善してきたように思われる。その一方で、女性が非正規雇用や地位の低い職業に就く場合には、自分の選択の結果としてその低い地位が正当化されつつある。こうしたなかで、男性と同じように女性が働くという女性労働研究が目指してきた方法によって、どのような問題が生じているのかを検討する必要性が高まっている。

このような社会的な変化が生じているにもかかわらず、女性労働研究では労働市場と家事労働の性別分業に中心的な関心を引き、女性が男性と同じように働くことを求めてきたことを第2章で整理した。日本では1980年代ごろから本格的に女性労働研究が始まったが、それを担ってきたのはマルクス主義フェミニズムであった。マルクス主義フェミニズムでは、市場労働と家事労働の間にみられる性別分業を男女平等のために解消するべき性差別として理論的に示し、その後の女性労働研究において中心的な役割を担ってきた。しかしながら、その後、マルクス主義フェミニズムの理論を支えてきた男性の安定的な雇用環境が崩れ、固定的な役割を規定する近代家族が縮小し、男女ともに市場労働者として競合していくなかで、労働市場の内部に焦点を移し、一見男性と女性が同じように働くということに伴う問題に女性労働研究が取り組む必要性が高まってきた。

そこで第3章では、労働市場のなかの地位決定の原則から、ジェンダーの格差が生じるメカニズムについての整理を行った。近代社会の地位決定の原則には生まれに基づく属性主義と、能力に基づく業績主義があり、近代社会が発展するに従って属性主義から業績主義へと移行するという。ところが実際には、業績主義が広がった後にも属性主義的な帰結となることがしばしばみられた。これを梶田孝道（1981）は「業績主義社会のなかの属性主義」と呼び、（1）属性によって取得する業績が異なることによって結果として労働市場での地位が属性によって異なってしまう「業績主義の属性化」、（2）もともと有利な属性を高く評価するという業績評価の基準がみられるという「属性に支えられた業績主義」という2つのメカニズムを提示した。本研究では、これをジェンダー研究として応用することを提案し、男女の間でみられる労働の種類の違いとして、対物労働、対人労働の違いに配慮して、続く第2部、第3部で梶田によるって提示された2つのメカニズムを検討した。

第2部では、「業績主義の属性化」について、学校教育のなかでみられる男女の進路の違いが、その後に就く職

業の違いにどのように結びついているかを検討した。業績主義の指標としては、能力そのものを指標とする「技能」と、その技能の発揮を認める証明となる「資格」を取りあげ、2つの章で検討した。まず、第6章では、学校教育とその後に就く職業にみられるジェンダーの分離、すなわちジェンダー・トラックのなかで、技能がもつ役割について検討した。その結果、女性はデータを高度に扱う職業には就きにくい傾向があるが、それは女性では男性と比べて卒業する学校段階が低いということによることが明らかになった。また、女性は人に対して高度な知識をもって接する職業に就く傾向があるが、それは学校段階だけではなく、女性が看護などの専攻を選択することによって生じていることが明らかになった。続く第7章では、技能を発揮することを認める「資格」として、正規雇用と専門職への就きやすさが男女で異なることに対して、学校教育にみられるジェンダーの分離がもつ影響について検討した。その結果、女性が正規雇用になりにくいのは人文科学系などの専攻をしていることによって、また専門職になりやすいのは看護などの専攻をしていることによって生じていることが明らかになった。このように第2部では、どのような職業（初職）に就くのかに関しては、性別よりもどのような学校教育を受け、どのような技能を有しているかが重要になることが明らかになり、技能を媒介として職業の獲得に対する性別の直接的な影響が見えなくなることが示された。

そして、第3部では「業績主義のなかの属性主義」のもうひとつのメカニズムである「属性に支えられた業績主義」を明らかにするために、労働市場および労働組織の内部における労働の評価のあり方について検討した。まずその準備として、第6章では女性の労働と対人労働とが実際に関連する程度についての検討を行った。その結果、従来から指摘されているとおり、女性の多い職業ほど対人労働を行っていることが明らかになった。さらに興味深い点として、職業に占める女性の比率を考慮すると、女性であっても男性であっても対人労働の程度には違いがみられないということが示された。つまり、対人労働を行う程度というものは本人の性別よりも、その職業の特性に規定されているということ、そして、その特性のなかでどの程度女性の仕事としての意味づけの強さに規定されているということが明らかになり、個々人の属性としてのジェンダーよりも、職業的な構造のなかのジェンダーをみる必要性が示唆された。その上で、第7章、第8章では、労働市場および労働組織における技能にもとづいた評価は、男女の地位の格差に対してどのように影響を与えているかを検討した。第7章では、労働組織のなかの対人労働が社会的な地位にもたらす影響について検討し、対人労働には特有の負担があるということ、その一方で、対人労働を指導するという技能制度が存在することによって負担が軽減されることが明らかになった。ただし、この分析では、他者との関係性のなかでの地位を分析の対象としたものであり、対人労働を技能として制度的に指導することが、社会経済的地位という構造的な地位にどのように影響しているかは明らかではなく、これについて第8章で検討した。その結果、女性の多い職業の社会経済的地位は、実は比較的高いほうであり、それは高い対人技能と専門職資格に支えられているものであるということが明らかになった。

以上の結果について、第9章ではまとめと議論を行った。まず結果をまとめると、第1に、「業績主義の属性化」については、女性であっても職業的な地位の高い異なる学校教育を選択することによって、その後の職業に関わる技能や資格、そして地位が異なるということが明らかになった。第2に、「属性に支えられた業績主義」については、女性の仕事であっても高い技能や職業的な資格を要する職業となることで、安定的な地位を形成することが可能であることが示されており、ただ対人労働であるということは女性の職業を低く評価するような単純な構造ではないことが示された。これらの結果は、女性という不利な属性であっても、技能や資格をもつということは安定的な地位をもたらすことを示唆している。つまり、女性の地位において、技能化、資格化は重要な役割を果たすことが示唆されたといえよう。ただし、これを女性の地位向上の戦略として取り入れるには限界もみられる。まず、技能化によっても、ケア労働など、技能として評価するという方法になじまない社会的に重要な労働を評価対象とできないという問題がある。次に資格化という点では、資格は他の者の参入をコントロールすることによって内部の地位を安定させていることがあり、すべての女性を取り込むことが困難という問題がある。業績主義を反映している技能化、資格化という評価のあり方を利用しながらも、それには反映できない公平性に考慮した上で、男女平等のための政策を実施することが求められる。

論文審査の結果の要旨

学位申請者である高松里江氏の研究主題は、現代日本女性の就業構造についての実証分析である。その研究スタンスは、労働経済学のエビデンス・ベースの知見などを取り入れつつ、女性の就業キャリアの各局面を、社会的な観点から検討するものである。その論旨は、以下のように読み取ることができる。

就労をめぐる男女の不平等については、マルクス主義フェミニズムをはじめとする先行理論がすでに扱ってきた。しかし、そうした旧理論がこの国において実態として対峙していたのは、日本型資本主義システムと家父長制の連携が、女性の社会的な地位向上を妨げていた戦後日本社会の構造であった。そこからの開放を目指す告発的・社会運動的な思想を背景において、多くの先行実証研究では女性の就業は、家庭内の性別役割分業と不可分にかかわるものとして扱われてきた。しかし、資本制と家父長制の変容が進んだ21世紀の女性たちが直面する就業環境を分析するためには、これでは不都合な面がある。

その問題点のひとつは市場労働の「主流」の分析枠組みとして成立している男性型のキャリア・モデルと、女性の就労の接合が難しく、市場労働における男女の競合をうまく分析できないことである。もう1つは、従来、家事労働として扱われてきたケアが、福祉国家レジームの進展によって家庭外に出て、「準市場」と呼ぶべき性質を伴う「ケア労働」という新たなニッチを形成している実態を捉えきれないことである。申請者が注目するのは、このケア労働が、看護師に典型的にみられるように、実態として女性比率の高い職種となっていて、それが一面では対人的なミットメントを要件とする感情労働でありながら、他方ではその技能が資格化されて、参入者が制度的に統制されているということである。女性の就業のこうした複雑な状況は、結果の不平等を性差別とみる一面的な告発論理では捉えきれない。申請者はこれを「見えなくなる」ジェンダー問題と呼び、そこを研究の起点として精緻化を進めていく。

申請者がそこで用いる分析概念は、人的資本(専攻分野まで含めた教育達成)、「業績主義の属性化」と「属性に支えられた業績主義」、性別職域分離(職種ごとの女性比率)、技能・資格、対人労働／対物労働、感情労働などである。そして、これらがライフコース上に配置されることで、ジェンダーをめぐる結果の不平等が生成していく構造が考察されていく。本論文前半で提示されているその枠組みは、考え抜かれた命題体系として作り上げられているとはかならずしもいえないが、後半の計量分析によって、それぞれの局面における女性の就労をめぐる実態が把握され、全体像が模索される。

まず第4章と第5章では、初職におけるジェンダーの偏りや雇用形態のジェンダー差が、男女の大学専攻分野の違いによって水路づけられるというジェンダートラック構造が明らかにされる。第6章では、マルチレベル分析により、女性が対人労働をする傾向があるのは、どんな職種に就いているときでも女性に対人労働が要求されるからではなく、対人労働の比率が大きい職種に女性が多く割り振られる結果であるという構造が示される。続く第7章では、典型的な女性職である看護師を対象とした調査から、感情労働によってもたらされる自己疎外が職場において調整されるプロセスが明らかにされる。最後の第8章では、男女の性別職域分離が、市場労働の評価である賃金に単純に性差を生じさせているわけではなく、女性職が専門職であるということによって、女性の労働の一部の評価がむしろ高められている面もあるということが明らかにされている。

労働経済学から社会心理学までを幅広く見渡した本研究によって、申請者は女性の労働研究の新たな視座を獲得するに至った。その研究センスと研究者としての将来性は十分なものと評価できる。申請者が、本研究をベースとしてこの先数年の間に展開する実証研究が、ニーズの大きいこの分野に新展開をもたらす可能性は大いにある。

以上により、本論文は博士(人間科学)の学位授与にふさわしいと判断された。